

露の玉 高尾ひとみ

秋の山里を訪ねました。蜻蛉の徒に在り先に在りして澄んだ川を辿り、大きな通草を見つけては柄ぎ、すこしずつ広がる青空や道端に咲く花を見、夕暮れには近くの山に月の上るのを待って、自然の中に溶け込むように時を過ごしました。

翌朝、川のほとりを散歩すると、道の両側の草や花はみな一粒ずつ露を乗せています。その露の一つ一つに朝日が差して、それはそれは美しいのでした。こんな綺麗な朝を迎えたのは、初めてでした。

野分去りなほ霧雨のつづきをり

川土手の小さき花に秋の蝶

川沿ひをゆけば虫の音とぎれなく

稲の香や山家へと日の差し始め

見おろせば里いちめんの稲穂かな

紫の花いろいろに秋野かな

釣舟草つりふねに川の流れの細きかな

月白のほらあそこにと人の言ふ

露の夜の言葉少なに更けにけり

葉に花にひとつひとつや露の玉

《作品鑑賞》

村上正人

高尾ひとみさんは、特別作品を創られるにあたり、日常から離れたところに身を移し、そこに丸一日あるいは数日身を置いて創作されるようだ。それはまさに、尊敬する師である佐保光俊先生の創作姿勢に通じるのである。素敵である。

野分去りなほ霧雨のつづきをり

最近の台風は去った後、台風一過のような晴天をもたらすことが少なくなった。「なほ霧雨のつづきをり」という時間の経過を表現して、このたびの野分をさりげなく特徴づけた。

稲の香や山家へと日の差し始め

先の霧雨が止んで、日差しが山家に及び始めた。視覚的な描写に加え、上五の「稲の香」がえも言われぬ清々しさを伝える。見事な取り合わせである。

葉に花にひとつひとつや露の玉

このたびの特別作品「露の玉」の題に因んだ作品である。それぞれ葉や花に、その曲面形状からか、確かに不思議と露はひとつひとつの生命を表しているようである。

暁子 令和3年11月度特別作品

秋吉台

暁子

国定公園「秋吉台」は私の生家ほど近く、幼い時から今日に至るまで、折あることに訪ねています。壮大な景観はもちろんですが、希少な野の花も多く、それらを探しながらの野歩きはまた格別です。そんな秋吉台の一年を思い浮かべながら詠んでみました。

山を焼く日和の続く朝かな

焼かれたる野に夕からの雨となる

蝶々のときには岩に止まるなり

夕焼が石の台地を染めにけり

洞を出て遠く近くに蟬の声

大岩に立ちて吹かるる秋の風

竜胆や丘の小道の幾曲がり

穂芒の中より人の現はるる

ドリーネを下つてゆける草紅葉

冬枯の丘の高きに鶯飛ぶ

《作品鑑賞》

村上正人

暁子さんは、普段の句会で日常の景を詠まれた作品が魅力的だが、前作の特別作品「秋の祭」でもそうであったように、大自然の中に身を置いて詠まれた句も大いに魅力的である。このたび、幼いころより何度も訪れたとおっしゃる「秋吉台」の、ほんの一部の景かもしれないが、親しみを込めて作品にされた。

夕焼が石の台地を染めにけり

秋吉台に見られるカルスト地形の石は、石灰岩質であるため白っぽい色をしている。草の間にいくつも見られる大きな石は夕焼の色そのものに染まるのである。

大岩に立ちて吹かるる秋の風

カルスト台地の大岩に立つと、周囲に遮るものがない。岩の上で秋の風に吹かれる。そのままの表現であるが、景に身を置く作者の心地よさが素直に伝わってくる。

ドリーネを下つてゆける草紅葉

長年の雨水で浸食された台地の大きな窪みがドリーネである。おそらく秋芳洞の入口なのである。白っぽい入口から暗闇に向けて下るのだが「草紅葉」の色がそこに生命があることを思い起こさせてくれる。